☆★矢野目小学校教育目標★☆互いを大切にし、 笑顔で協働する子ども★☆★も
★☆自ら学び、深く考えて行動する子ども☆★ 心と体を鍛え、 命を大切にする子ど

令和6年度矢野目小学校　学校だより

みんなの広場２

笑顔が あふれ、明日もまた 来たく なる 学校

2024.10.7発行　No.70　文責　目 黒　満

今日から 11 月 1 日(金)までの４週間、教育実習生の遠藤瑞樹先生が来ています。遠藤先生は本校の卒業生で、将来は小学校の先生になりたいと考え、先生になるための勉強をがんばっています。
所属は 4 学年ですが、学年を問わず、矢野目小の先輩といろいろなお話をしてみるのもいいですね。

特別支援教育特集　その３

家庭と学校ががっちり手を繋ぐ２年目に

特別支援学級＜ 知的障がい学級 ＞ での学び

日本では古くから、障がいのある人とない人が別々の空間で学ぶのが一般的でした。ですが、今は「統合教育」「インクルーシブ教育」の考え方が主流になっています。ざっくり言うとこんなイメージです。

統合教育 ＝ 障がいのない子どもたちの集団の中で障がいをもった子どもたちも一緒に学ぶ

インクルーシブ教育 ＝ 障がいの有無に関わらず「人は一人一人それぞれ違っているのが当たり前」という前提で、生活や学習に困難がある場合には、その子にあった支援を工夫しながら「すべての子どもが一緒に」学ぶ

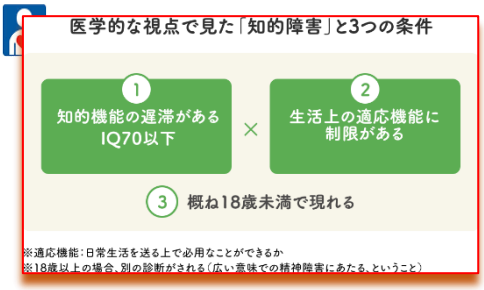
こうした考え方が現在の特別支援教育の基盤です。「それなら、通常学級でみんなが一緒に学べばいいのでは・・」と思います。実際、アメリカ等では、車椅子や肢体不自由の子どもたちが通常の教室で、他の子どもたちと一緒に学んでいます。でもそこには、何人ものボランティアや保護者等が常に付き添い、介助や学びの支援をしています。そんな文化が伝統的にある国ではそれができます。

しかし、そんな文化が浸透していない（浸透しないのかも・・・）日本では、担任が一人で、現状の日本の大きなクラスサイズの学級（20～35 人程度）で、様々な障害を持った子どもたちが一緒に、「一人一人に応じた適正な学び」を実現することは難しい状況です。

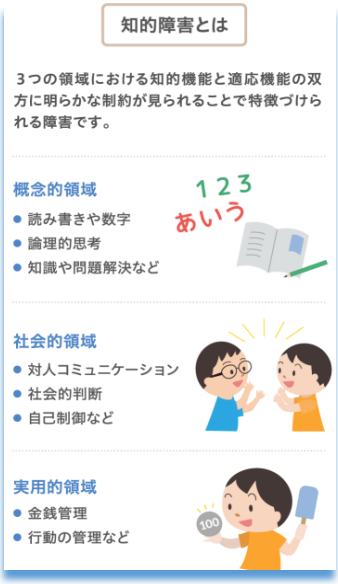
仮に、様々な障害を持った子どもたちも含め 20～35 人規模の学級集団の一人一人に対して、充実した指導・支援ができる教員は、かなりのハイスペックな教員だと考えます。（ちなみに、私が教えてきた外国語教育の分野における欧米での適正なクラスサイズは、1クラス 15 名以下が絶対的な条件になっています・・・）

そこで、特別な支援が必要な児童生徒一人一人の多様なニーズに対応できるよう、小人数（最大 8 名）の特別支援学級で対応する環境を提供しています。68号で、特別支援学級は8種類とお知らせしましたが、その中でも学級数が多いのが**知的障がい学級**と**自閉症・情緒障がい学級**です。本号では、まず知的障がい学級についての情報から・・・。

知的障がい学級での学びが望ましい子どもたちって？



知的障がいは、「**知的機能の障がいが発達期（おおむね18歳まで）**にあらわれ、日常生活に支障が生じているため、**何らかの特別の援助を必要とする状態にある**」ことです。（厚生労働省の定義）



知的機能と日常生活能力（自立・運動・意思交換・探索操作・移動・生活文化・職業）の２つの項目について検査・測定し、どちらの項目にも適応上の制限がある場合、知的障がいと判断されます。

右図の 3 つの要因等により、脳の知的作業をつかさどる部分の障がいによるものが多いようです。

学校での教科学習では、複雑・高度な内容は理解・習得が難しいため、通常学級の子どもたちより**学習内容も時間も少なくし**、その分、**自立活動といった生活面での適応に向けた学習**をします。

こうした子どもたちが、自分のペースで、少ない人数の中、安心して学べる環境があるのが知的障がい学級です。

次号は自閉症・情緒障がい学級について特集します。